

バングラデシュ仏教の現状・調査報告

岡本 健資

(龍谷大学文学部講師)

目 次

- 1 調査の概要
- 2 バングラデシュ北部における調査と協力体制
- 2 バングラデシュ南東部における調査と協力体制
- 3 バングラデシュ南東部の寺院調査
 - (1) ランクート・モナスタリ
 - (2) ラマパラ・ヴィハーラ
 - (3) アツガ・メーダ・キャウン
 - (4) バハルチャラ・ブディスト・モナスタリ
 - (5) チッタゴン・ブディスト・モナスタリ
- 3 調査を終えての所感

【キーワード】：バングラデシュ・チッタゴン・コックスバザール・ビルマ・イスラ

ム

1 調査の概要

①期日：2010年8月11日（日）～8月22日（日）

②調査者：若原雄昭（龍谷大学理工学部教授）・岡本健資（龍谷大学文学部講師）

③調査目的：バングラデシュにおける仏教徒コミュニティ現状調査と調査協力体制の構築。

④調査方法：現地における宗教研究者との協議・仏教関係者への聴取＜聴取対象は、ダッカ大学パーリ学仏教学科教授 Dillip Kumar Barua 博士との協議に基づき選定＞

⑤調査日程

8月11日（水）Dhaka ＜Hazrat Shahjalal International Airport (元 Zia International Airport)に到着＞
8月12日（木）Dhaka 午前① Dhaka 大学 Department of Pali and Buddhism の学科長 Dillip Kumar Barua 博士と午後開催の学術交流セミナーの打ち合わせ。 午後② Dhaka 大学 Department of Pali and Buddhism 主催で Special Seminar 2010 に出席し、若原と岡本が研究発表。質疑応答やセミナー後の集まりにおいて、Bangladesh National Museum の Researcher である Niru Shamsun Nahar 博士などの研究者と交流。
8月13日（金）Dhaka→Rajshahi 午前 D. K. Barua 博士・Nahar 博士と調査スケジュールの打ち合わせ。 午後 バングラ北部の都市 Rajshahi へ車移動。
8月14日（土）Rajshahi 午前 Rajshahi にある国立大学 University of Rajshahi に属する博物館 Varendra Research Museum に到着。博物館を観覧後、所蔵された仏教関連資料リストを閲覧。 午後③ Varendra Research Museum の Director である Md. Zakaria 氏と面会。博物館が保存する歴史資料の閲覧に関し協力要請。
8月15日（日）Rajshahi→Puthia→Dhaka 午前 前日に続き、同博物館所蔵の仏教関連リストや学術報告書を閲覧し入手。 午後 ダッカへの帰途、Puthia のヒンドゥー寺院群を観覧。Nahar 博士より創建当

時の信仰形態や、現在の保存状況について説明を受ける。その後、Dhaka へ。
8 月 16 日（月）Dhaka 午前・午後 D. K. Barua 教授とともに、17 日より開始する Chittagong 地区周辺寺院調査準備と打ち合わせ。
8 月 17 日（火）Dhaka→Chittagong 午前・午後 Dhaka から Chittagong へ車移動。 午後④ Chittagong 大学 Department of Oriental Languages の学科長 Gyana Ratna 博士より Chittagong 周辺寺院に関する聞き取り調査。
8 月 18 日（水）Chittagong→Cox's Bazar 午前 Chittagong からさらに南へ移動し、Burma（=Myanmar）国境付近の海岸都市 Cox's Bazar へ到着。 午後⑤ Cox's Bazar 周辺寺院 Rangkut Monastery 訪問。 午後⑥ 同じく Cox's Bazar 周辺寺院 Lamapara Vihara 訪問。
8 月 19 日（木）Cox's Bazar→Chittagong 午前⑦ Cox's Bazar 周辺寺院 Aggamedha Kyaung（4 つの寺院から成る複合寺院）訪問。住職は U. Wanna 比丘（ビルマ出身 36 才）。所属は Sudharma Nikaya(?)。 午前⑧ Cox's Bazar 周辺寺院 Baharchara Buddhist Monastery 訪問。住職は Gyana Lankara 比丘（Ramu のラカイン族出身 52 才）。 午後 Chittagong へ移動。
8 月 20 日（金）Chittagong→Dhaka 午前⑨ バングラデシュにおける仏教二大宗派の一つ Mahasthavira 派の根拠地とされる寺院 Chittagong Buddhist Monastery 訪問。住職は Chittagong 大学教授でもある Jinabodhi Bhikkhu 博士。同氏を取材。 午後 Dhaka へ移動。
8 月 21 日（土）Dhaka 午前⑩ Dhaka 大図書館責任者 M. Nasiruddin Munshi 博士の許可を得て、館内の貴重書を閲覧し、所蔵資料のカタログを入手。

午後⑪ バングラデシュにおける仏教二大宗派の一つ Sangharaja 派の根拠地である Dhaka 市郊外にある Dharmarajika 寺院訪問。現状について取材。

8月22日（金）Dhaka→帰国

午前⑫ Dhaka 大学副学長 Harun-or-Rashid 博士と懇談。バングラにおけるムスリムと政治の関係についての取材。※同氏は政治と宗教の関係を論じた業績を多数著している政治学者。

〈帰国のため、深夜 Hazrat Shahjalal International Airport より関空へ向けて出発。〉

2 バングラデシュ北部における調査と協力体制

バングラデシュの首都ダッカへ到着すると、翌日は、ダッカ大学のパーリ学仏教学科の学科長ディリップ・クマル・バルア（Dillip Kumar Barua）博士の協力を得て、現地研究者との学術交流のため、同学科主催の特別セミナーに参加し研究発表する機会を持つことができた。この際、現地の研究者たち（バングラデシュ国立博物館の研究者 N. S. Nahar 博士等）からバングラデシュ仏教に関する情報を得ることができた。次いで、古い時代におけるバングラデシュ北部における仏教伝播に関する情報を得るため、ダッカ大学 D. P. バルア博士と国立博物館 N. S. ナハル博士の協力を得て、パーラ朝を中心とした多数の文物を収蔵していることで知られる、バングラデシュ北部の博物館ヴァレンドラ研究博物館（Varendra Research Museum）を来訪する機会を得た。バルア・ナハル両博士の同行によって、博物館長 Md. Zakaria 氏の許可がおり、この博物館所蔵の貴重な仏教・イスラム教の考古資料を閲覧することができた。また、これらの資料とともに、美術史学を専門とし、ご自身もイスラム教徒であるナハル博士の解説を通して、イスラム勢力が当該地域へ進出した当時の様子を知ることができ、異宗教同士の邂逅によって生じた現象の一端を垣間見ることができた。古来、文化的にインドからの影響が強く残るバングラデシュ北部地域は、イスラム化も早期に進んだ地域であり、同地域における仏教を調査するにあたっては、絶えず、ヒンドゥー・イスラム両宗教の動向を見据えて調査をする必要がある。既に、当該地域における調査に関してはダッカ大パーリ学仏教学科スタッフの協力が得られることが確認されており、上記のナハル博士も今年4月より数ヶ月間、龍谷大学への招聘が決定している。今後、バングラデシュ北部地域における仏教徒調査の協力体制は比較的充実したものとなるはずである。

3 バングラデシュ南東部における調査と協力体制

バングラデシュの仏教を研究するならチッタゴンへ行く必要がある。2009 年の予備調査の際、ダッカ大学で会見した複数の仏教研究者がそう語っていた。バングラデシュの国土の大半は、インド亜大陸の東部に位置し、ガンジス河口のデルタ地帯を覆う。この点で、同国は南アジア地域に分類される。しかし、バングラデシュの南東部は、ベンガル湾を囲う海岸線沿いに長く南へ延びてビルマと国境を接し、地勢的に東南アジア地域との繋がりが深い。

チッタゴン（Chittagong）はバングラデシュの南東部に位置し、ダッカからは車で 6 時間ほどかかる。当該地域における調査と協力体制構築のため、8 月 16 日にダッカ大学のバルア博士とチッタゴン行きに関する日程調整を行い、翌 17 日にチッタゴンへ移動した。総人口の 9 割以上がイスラム教徒であるバングラデシュにあって、チッタゴンには仏教徒が非常に多く、その受け皿としての仏教寺院も数多く存在する。バングラデシュ仏教の現状を知るために、まずはチッタゴン地域での仏教寺院や出家者、仏教徒の総数を知る必要がある。国勢調査などのデータ収集を目的として、バルア博士の旧友であるチッタゴン大学の東洋言語学科長ギャン・ラトナ（Gyana Ratna）博士（図中の向かって右の人物。左は D. K. バルア博士）を訪ねた。



ギャン・ラトナ博士は、バルア博士と同じくかつて愛知学院大学に在籍し、故・前田恵学教授に師事、博士論文も日本語で記述した親日家の研究者である。ギャン・ラトナ博士によれば、少なくともチッタゴン周辺の仏教寺院や仏教徒に関する統計データは存在せず、バングラデシュ全体に関しても詳細なデータは存在しないかもしれないとのことだった。我々が来る前に、金融系企業の社員も博士のもとに来訪し、そのようなデータの有無を質問していったという。彼らはおそらくダッカにも問い合わせを行ったであろうから、やはりギャン・ラトナ博士が語るとおり、バングラデシュにおける仏教徒に関する詳細な統計データは存在していない可能性が高い。従って、そのような統計データの作成は、当該国の仏教徒の現状を把握する上での重要かつ初めての試みとなる。統計データに関しては、インド西ベンガル州における仏教徒の現状についてのデータを記した文献（*Directory*

of Theravada Buddhist Temples in Eastern India) が我々の手元にあった。今回のバングラデシュ調査に先立ち、インド西ベンガル州コルカタ調査を行った際に、若原が同書の著者ブラフマンダ・プラタプ・バルア (Brahmanda Pratap Barua) 氏ならびに出版者スジト・クマル・バルア (Sujit Kumar Barua) 氏に面会して直接入手したもので、2010 年に全インド・ベンガル仏教徒連盟 (All India Federation of Bengali Buddhists) から出版されたばかりの、最新のベンガル仏教徒ならびに寺院事情の詳細なデータを記した書籍である。この書籍をサンプルとして、チッタゴン周辺寺院や仏教徒に対する調査協力について、ギャン・ラトナ博士と打ち合わせを行った。結果、チッタゴン周辺の山岳地帯 (CHT=Chittagong Hill Tracts) を含めると寺院数は相当数有るため、市内から少しずつ始めることなら可能であるとの回答を得た。今後は、アンケート票に掲載する調査項目を決定し、徐々に調査を行うことになる。データが集まってくれば、仏教寺院の支持者の現状や、他宗教との関係の実際が明らかになるであろう。

4 バングラデシュ南東部の寺院調査

コックスバザール (Cox's Bazar) は、チッタゴンの南に位置するリゾート地であり、文化圏としてはチッタゴンと類似する。南北に細長く伸びたこの同地域は、西にはベンガル湾を望む砂浜の海岸線が長さ数キロに渡って伸びており、バングラデシュ人たちは世界最大の砂浜だと称している。反対に位置する東側には、ビルマとの国境線が走っており、チッタゴンよりもさらに東南アジア地域の影響が濃い。今回の調査ではそのことを思い知ることになった。

(1) ランクート・モナスタリ

チッタゴン周辺地域に位置づけられるコックスバザールでの仏教寺院を取材するために、まず、ランクート・モナスタリ (Rangkut Monastery) を来訪することにした。同寺院はバングラデシュにおける二大宗派の一つサンガラージャ (Sangharaja) 派に属しており、ギャン・ラトナ博士の戒師であるプラッギャヴァンサ長老 (Pragyavamsa Thera) が住職をつとめる。創建に関しては紀元前 308 年にアショーカが創建したとされる。1932 年に盗難に遭うまでこの寺院に存在していた碑にそう記してあったため



あるという。しかし、残念ながら、その碑は現在見るできない。プラッギャヴァンサ長老は現在 61 歳で、かつては十二頭陀を行じていたとされ（図は頭陀を行った当時の同長老）、尊敬を集める比丘である。同寺院で彼と同居する出家者たちの内訳は比丘が 8 名、沙弥 4 名であり、約 100 家族が彼らを支えている。この寺院の他、周囲に仏教寺院が 10 ヶ寺以上点在するという。ムガール時代にさかのぼるという墓地も存在し、歴史のある寺院であることに相違ない。長老に本プロジェクトの説明を行うと、協力を快諾してくれた。今後、同地の調査を行う上で貴重な協力を得られそうである。

(2) ラマパラ・ヴィハーラ

コックスバザールには、ビルマ風の建築様式を持つ寺院が多数存在する。ラムー (Ramu) という地にあるラカイン (Rakhine) 族の寺院であるこのラマパラ・ヴィハーラ (Lamapara Vihara) もその一つであり、ビルマからの影響が強い地域だと判る。堂内では老比丘が独りで信者 (10 人ほど) の人生



相談を受けながら呪符を授けていた。残念ながら、この老比丘からの聴取はできなかったが、堂内にいた信者の約半数は、その装束からイスラム教徒だと判断できた。さらに、外でも老比丘との会見の順番を待つイスラム教徒が履物を脱ぎ待機していたが、その表情は真剣なものであった。聴取ができなかったため、創建年・創建者、構成僧侶数、信者数ともに不明であるが、イスラム教国における異宗教の共存という観点から、興味深い素材を提供する寺院であり、今後詳細な調査を要する。

(3) アग्ガ・メーダ・キャウン

アग्ガ・メーダーウィ (Agga Medawi) 比丘が 1799 年に創建したマハー・ティンダウグリー (Maha Thindawgree = Mahasindagri(?)) という寺院は、同じ敷地内にある 3 ヶ寺とともに、計 4 ヶ寺からなるアग्ガ・メーダ・キャウン



(Aggamedha Kyaung) という名の複合寺院を構成する。現在、この寺院で生活するウアンナ (W. Uanna) 比丘から話を聞くことができた。ウアンナ比丘は 2004 年に同寺に着任したビルマ出身の 36 歳の比丘である。合計で比丘が 3 名と沙弥 1 名がいると言うので、4 名の出家者からなる複合寺院ということになる。彼らを支える信者は約 100 家族で、僧も信者もすべてラカイン族であるという。所属の宗派を尋ねると、スダルマ・ニカーヤ (Sudharma Nikaya(?)) という名がかえってきた。初耳であったが、おそらくはビルマの宗派だと推測される。いずれかの本山から派遣されたのではなく単立である由。また、ウアンナ比丘は英語ばかりかベンガル語も通じず、ビルマ語やラカイン族の言語だけを話していた。そのため、バルア博士もうまく通訳できず、偶然に寺院の仕事の手伝いをしに訪れていた付近の大学生が、我々の英語を現地語に翻訳してくれたおかげでウアンナ比丘との対話が可能となった。今後、チッタゴンやコックスバザール地域の寺院調査にあたっては現地語 (ビルマ語・ラカイン語・マルマ語など) を解するスタッフが不可欠であるという教訓を得た。

(4) バハルチャラ・ブディスト・モナスタリ

コックスバザールではもう 1 カ寺バハルチャラ・ブディスト・モナスタリ (Baharchara Buddhist Monastery) を訪れた。ここでも住職のギャン・ランカラ (Gyana Lankara) 比丘と会見できた。同氏はコックスバザールの北にあるラムー (Ramu) 出身のラカイン族で 52 歳、



受戒もこの寺院においてである。同寺に属す出家者は、彼の他に沙弥 3 名である。彼らを支えるのはバルア族仏教徒が 30 家族、ラカイン族仏教徒が 30 家族の計 60 家族。寺院は 6 年前 (2004 年) に再建されたそうだが、創建は 117 年前 (1893 年) だという。受戒堂 (戒壇院) には、Cox's Bazar という地名にその名を残す植民地時代のイギリス人統治者コックス (Cox) 自身が寄進したという仏像が安置されていた。

(5) チッタゴン・ブディスト・モナスタリ

バングラデシュ二大宗派であるサンガラージャ (Sangharaja) 派とマハースタヴィラ (Mahasthavira) 派の内、マハースタヴィラ派の根拠地とされる寺院がチッタゴンにあると聞き、取材する。クリシュナ・ナジル・チャウドリ (Krisna Nazir Chawdhury) 氏によ

って 1889 年に創建されたチッタゴン・ブディスト・モナスタリ（Chittagong Buddhist Monastery）というこの寺院は、現在、55 歳のジナボーディ博士（Dr. Jinabodhi Bhikkhu）が住職を勤めている。同氏（図中の左から三番目の人物）はチッタゴン大学東洋言語学科教授で



あり、現在もバングラデシュ政府と関係する職に就いているという。また、イスラム教徒との対立について尋ねると「良い関係を保っており、問題は無い」と答えてくれた。しかし、それは住職が持つ肩書と無関係ではないかもしれない。宗教活動の点では、1998 年以降に、ジナボーディ博士自身が創立した Buddhist Research and Publication Centre-Bangladesh という組織を通して、出版物とともに人員をバングラデシュ北部地域に送る一方、チッタゴン周辺の山岳地帯に四つの学校（高校、孤児院が各 1 校、小学校が 2 校）を開設したという。以上のように、伝道活動も精力的に行っているこの寺院の構成員は、比丘が 15 名と沙弥が 12 名で、彼らを支える信者は 250 家族である。我々が訪れている間も、外にある在家者向けの礼拝堂は常に信者で溢れていた。

5 調査を終えての所感

「アジア諸地域における仏教の多様性とその現代的可能性の総合的研究」のユニット 1（南アジア地域班）の中にあって、ベンガル仏教徒調査は、サブユニット 3 に位置づけられる。同サブユニットでは、今年度の目標の一つとして、「ベンガル仏教徒に関する基礎的情報の収集」を目標として掲げていた。既に本報告にて言及したとおり、インド国内のベンガル仏教徒の動向に関しては、その基礎情報としての価値を有する研究書（*Directory of Theravada Buddhist Temples in Eastern India*）が入手できたこと、そして、若原の報告に記載されるインド・コルカタにおけるベンガル仏教徒の主要寺院調査によって、今年度の目標の半分以上は達成されたと言って良い。残された課題はバングラデシュ国内の仏教徒調査である。この点については、チッタゴン大学ギャン・ラトナ博士の指摘により、バングラデシュにおける仏教徒に関する詳細な調査が行われた形跡の無いことが判明した。とはいえ、今後、ダッカ大学とともに、南東部に影響力を持つチッタゴン大学とも調査協力体制が構築できたことは成果であろう。

バングラデシュ国内では、小規模ではあるが、北部地域において 1900 年代後半になっ

てアーディヴァーシーたち（＝もともと住んでいた人々）が新たに仏教へ改宗しはじめたことが確認され、今後もダッカ大学と協力しての北部調査が必要となる。南東部調査には、チッタゴン大学の協力が得られるため、今回の調査で経験した言語的な問題などは解消できるであろう。また、今回の調査でイスラム教徒との間に軋轢があると答えた出家者もいたが、より多くの寺院を巡って基礎情報の収集を行う必要があったため、当該地域に見られる宗教的非寛容の詳細について確認する時間がなかった。今後は、そのような問題を確認するとともに、異宗教が同一地域において共存、多元的共生のための姿勢や工夫を聴取する必要がある。